

# 羽犬塚寺ノ脇遺跡

福岡県筑後市大字羽犬塚所在

市立羽犬塚小学校管理教室棟立替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

筑後市文化財調査報告書

第24集

2000

筑後市教育委員会

# 羽犬塚寺ノ脇遺跡

福岡県筑後市大字羽犬塚所在

市立羽犬塚小学校管理教室棟立替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

2000

筑後市教育委員会

## 序

筑後川と矢部川に挟まれる筑後平野の中央に位置する筑後市域は、古代より水稻耕作の適地として開墾が進み、また交通の要衝として多くの人々が往来することにより、歴史を刻んできました。

羽犬塚寺ノ脇遺跡の発掘調査は、老朽化した羽犬塚小学校の管理棟の立替え工事に伴い、平成10年5月から6月にかけ、筑後市教育委員会が実施したものであります。ここは、近世宿場町として栄えた羽犬塚宿の中でも、中心となる施設である「御茶屋」が位置していたところとして、古くから遺跡の存在が知られていた場所であります。今回の調査により、近世宿場町の情景の一端でも、思い描いて頂ければ幸いと考えます。

発掘調査中には、学校関係者、児童、保護者、工事関係者各位に、多大なご協力とご援助を頂きました。ここに心から感謝を表する次第であります。

本書が文化財保護の理解を深める一助となり、合わせて研究資料としてご活用頂ければ幸いです。

平成12年3月

筑後市教育委員会

教育長 車田口 和良

# 例　　言

1. 本書は、市立羽犬塚小学校の管理棟立替え工事に伴い、筑後市教育委員会が平成10年度に大字羽犬塚字寺ノ脇において実施した、埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 本書使用の遺構実測図は、立石真二、末吉貴弥が作成し、浄書は立石が行った。
3. 本書使用の遺物実測図は、平塚あけみが作成し、浄書は立石が行った。
4. 本書使用の写真は立石、末吉、永見秀徳が撮影した。
5. 本書使用の標高は海拔高であり、方位はG. Nである。
6. 本書の執筆、編集は立石が行った。
7. 本書に掲載した遺物の縮尺は1／3を基本とする。
8. 本書に掲載した遺構の縮尺は1／40を基本とする。
9. 本書に関わる図面、写真、遺物等の資料は、筑後市教育委員会で保管・管理され、今後公開・活用される予定である。

# 本　文　目　次

第1章 はじめに	
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の経過	2
3. 調査体制	2
第2章 位置と環境	
1. 自然概要	5
2. 歴史的環境	5
3. 羽犬塚寺ノ脇遺跡周辺の歴史的環境	6
4. 羽犬塚御茶屋の歴史	6
第3章 遺構と遺物	
1. 基本層序	11
2. 遺構	11
3. 遺物	14
4. 小結	15
第4章 考察	
1. 筑後市内の近世窯業	17

## 挿 図 目 次

Fig. 1 羽犬塚寺ノ脇遺跡試掘トレンチ位置図 (S = 1 / 600) .....	1
Fig. 2 旧薩摩街道線図 (S = 1 / 25,000) .....	6
Fig. 3 羽犬塚寺ノ脇遺跡の周辺遺跡分布図 (S = 1 / 12,500) .....	7
Fig. 4 羽犬塚宿場町略図 (『筑後市史』より転載) .....	9
Fig. 5 基本層序 (S = 1 / 40) .....	11
Fig. 6 羽犬塚寺ノ脇遺跡全体図 (S = 1 / 150) .....	12
Fig. 7 溝状遺構土層断面図 (S = 1 / 40) .....	13
Fig. 8 溝状遺構出土遺物 (S = 1 / 3) .....	15
Fig. 9 筑後國近世窯位置図 (S = 1 / 379,000) .....	17
Fig. 10 水田焼、赤坂焼、板東寺焼と思われる土器 (羽犬塚寺ノ脇遺跡出土、S = 1 / 3) .....	19
Fig. 11 水田人形 (市内採集品、S = 1 / 2) .....	19

## 表 目 次

Tab. 1 溝状遺構出土遺物一覧表 (土器・陶磁器) .....	21
Tab. 2 溝状遺構出土遺物一覧表 (木器) .....	21
Tab. 3 溝状遺構出土遺物一覧表 (鉄器) .....	21

## 図 版 目 次

### 表紙

羽犬塚寺ノ脇遺跡 全景 (北から)

P L. 1

試掘調査 第1トレンチ (西から)

試掘調査 第3トレンチ (南から)

P L. 2

溝状遺構 完掘状況 (北から)

溝状遺構 A軸土層断面 (南から)

P L. 3

溝状遺構 B軸土層断面 (北から)

溝状遺構 C軸土層断面 (北から)

P L. 4

溝状遺構 D軸土層断面 (北から)

溝状遺構 E軸土層断面 (北から)

P L. 5

溝状遺構出土遺物 (1) (土師器・陶磁器)

P L. 6

溝状遺構出土遺物 (2) (瓦・鉄器)

水田焼・赤坂焼・板東寺焼と思われる土器  
(羽犬塚寺ノ脇遺跡出土)

P L. 7

水田人形 (市内採集品)

# 第1章 はじめに

## 1 調査に至る経過

施設の老朽化に伴う羽犬塚小学校の管理教室棟立替えは、平成7年度の筑後市議会において計画が審議され、8年度からの計画実施が議決された。平成9年度には旧校舎の建物部分の取り壊しが完了し、筑後市教育委員会総務課（以後「甲」とする）より、同社会教育課（以後「乙」とする）に対して、工事区域における試掘調査の依頼がなされた。当初「乙」では他の発掘調査に追われており、試掘等の調査を平成10年度に行うこととすることで、両者による調査工期の調整を行った。平成10年1月20日には、旧校舎建物の除去が行われ、これに伴い今回調査対象となった範囲の大部分が搅乱されることとなった。

平成10年4月28日、「甲」より「乙」に対し、試掘調査の依頼がなされた。これを受けて「乙」では5月6日、対象地において試掘を行った（Fig. 1）。試掘はバックフォーにより行い、旧校舎部分に東西方向に2ヶ所、新たに設けられる学校食堂部分において、東西方向に1ヶ所と南北方向に2ヶ所づつ、計5ヶ所において掘り下げを行った。その結果、旧校舎部分は、基礎の抜き取り工事等に伴う破壊が激しく、遺構の存在は絶望的であった。一方の学校食堂部分でも、多くの搅乱の存在が認められたが、町囲いに伴うと見られる溝が確認された。5月7日、この結果を受け、両者は再度協議を行い、その結果、学校食堂の建てられる約320m<sup>2</sup>の部分について、発掘調査を行うこととなった。調査は5月8日より行い、6月12日に全ての作業を終了した。

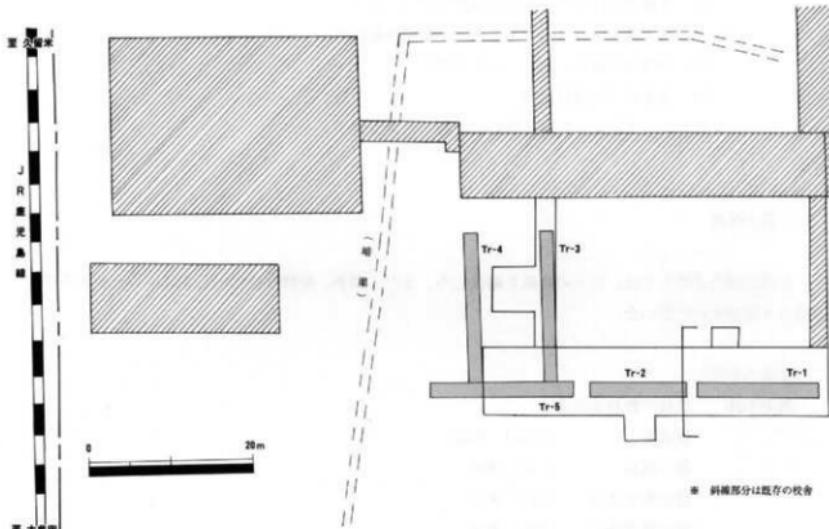


Fig. 1 羽犬塚寺ノ脇遺跡試掘トレンチ位置図 ( $S = 1/600$ )

## 2 調査の経過

羽犬塚寺ノ脇遺跡では、新校舎の竣工期日が決まっていたため、試掘調査の終了後そのまま本調査を行うこととなった。表土はバックフォーにより除去を行った。調査区の表土にはガラスや陶磁器の破片が多く混入しており、危険な状況であった。また、グラウンドに直面しているため児童が入りやすい状態であった。この対策として調査区の周囲を簡易フェンスにより囲い、極力事故が起こらないよう努めることになった。重機による表土除去が終了した後、作業員により遺構の検出を行った。遺構上部には飼育小屋設置に伴う攪乱があり、これを除去後、遺構の掘り下げに取りかかった。6月7日、羽犬塚小学校6年生を対象とした現地説明会を行い、8日、校舎3階より全体写真を撮影、11日には機材を搬出し、12日までに現場の埋め戻しを終了、調査を完了した。

### 《調査日誌抄録》

1998. 5. 6 バックフォーによる試掘  
7 協議（予算決定）  
11 簡易トイレ搬入  
14 バックフォーによる表土除去開始  
15 表土除去終了、簡易フェンス搬入  
18 機材搬入、検出作業開始  
19 攪乱除去開始（～21）、座標測量  
20 レベル移動（～21）  
25 遺構掘り下げ開始（～6. 8）  
29 基礎抜き部分の落ち込み確認作業（～6. 8）  
6. 8 羽犬塚小学校6年生を対象とした現地説明会  
10 全体写真撮影、簡易フェンス撤去  
11 測量終了、機材搬出  
12 バックフォーによる埋め戻し終了、調査終了

## 3 調査体制

本遺跡調査に関しては、以下の組織を編成した。また、調査、整理作業に関しては、各方面からの協力と援助をいただいた。

### 〈平成10年度〉

調査主体	筑後市教育委員会
教育長	牟田口 和良
教育部長	下川 雅晴
社会教育課長	山口 逸郎
社会教育係長	田中 清通
	永見 秀徳 小林 勇作 上村 英士 田中 剛

嘱託	柴田 剛	立石 真二（調査担当）		
調査作業	江崎 末廣	小野 カトリ	鶴 芳輝	馬場 孝司
	馬場 千鶴子	平井 正芳	平井 良治	村上 美津子
	室園 京子	(50音順)		
整理補助員	平塚 あけみ	江藤 玲子		
整理作業	野口 晴香	野間口 靖子	馬場 敦子	湯川 琴美
作業協力	末吉 隆弥（現 川崎町教育委員会）			

〈平成11年度〉

調査主体	筑後市教育委員会			
教育長	牟田口 和良			
教育部長	下川 雅晴			
社会教育課長	庄村 國義			
文化係長	田中 優一			
	永見 秀徳	小林 勇作	上村 英士	
嘱託	柴田 剛	立石 真二（7月～）		
整理補助員	平塚 あけみ			
整理作業	野口 晴香	野間口 靖子	馬場 敦子	湯川 琴美

なお、今回報告の遺跡の調査に伴い、羽犬塚小学校の教職員およびPTAの方々には安全確保のために多大な協力を頂いた。また、整理作業に関して下記の方々の御協力、および御教示、御指導を賜った。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）

近本 喜積（筑後市文化財専門委員会々長） 小田 和利（福岡県教育委員会）



## 第2章 位置と環境

### 1 自然概要

筑後市は福岡県の西南部に位置する。北には久留米市、三瀬郡三瀬町、東には八女市、八女郡広川町、西は三瀬郡大木町、南は山門郡瀬高町、同三橋町が接する。

地形的には筑後平野の中央部に位置し、北部には耳納山地より派生した八女丘陵が東西に延びる。これを最頂部として中央から東部には中位～低位段丘が広がる。南部には矢部川が西流する。市の南東部にはこの矢部川により形成された扇状低湿地が広がり、西部はクリークの広がる三角州状低湿地地帯である。

気候は内陸性で、夏と冬の寒暖の差は大きく、降水量も不安定である。水利権は激しく絡み合い、市内を流れる河川には、多くの用水路が接続する。しかしながら、当地は米と麦の二毛作が盛んな穀倉地帯であり、い草の栽培も行われている。

### 2 歴史的環境

筑後市域は古くから豊かな環境であつたらしく、早い時期から人々の生活の痕跡を見る事ができる。

縄文早期の遺跡としては市の南部、上北島の裏山遺跡が知られているが、近年の調査により、鶴田から志にかけての中位～低位丘陵上に、同時期の遺跡が点在することが明らかとなった。土器の大半は押型文土器であり、一部には早水台式も含まれているが、その多くは田村式の楕円文である。また、八女丘陵より派生する前津丘陵（市の中央部）でも押型文土器が出土している。

縄文時代前期から後期にかけての明確な遺跡は現時点では確認されていない。

縄文晩期に入ると矢部川北岸の常用地区に集落が営まれる。同時期には東方に八女市の龜甲遺跡、南方には瀬高町の椎現塚北遺跡がある。この時期以降、遺跡の数は増加していく。常用に近い水田には、支石墓と言われる平蓋石がある。近年の調査により、ここから南へ少し下がったところから壺棺が見つかっている。これは中期のものと考えられている。弥生時代後期には北から藏敷、上北島、古島、常用と大規模な集落が営まれる。筑後地域の弥生中期から後期の集落遺跡からは、周溝状遺構が検出されるのも特徴である。終末期には古くから狐塚遺跡が知られている。最近では南部の津島において、この時期の遺跡が調査されている。矢部川の上流、八女市や対岸の瀬高町・立花町でも弥生時代中期から後期にかけての遺跡が数多く存在する。

古墳時代には八女丘陵上に八女古墳群が形成される。筑後市内では欠塚古墳（5世紀中頃）、瑞王寺古墳（5世紀後半）が知られている。集落としては、田佛遺跡がある。これは弥生時代集落との複合遺跡で、古墳時代のものは5世紀前半と5世紀中頃の2群に大別される。

律令期にはいると、筑後市の中央を西海道が南北に継続する。現在、市内では中部では山ノ井、南部では鶴田でその一部が確認されている。集落では前津中ノ玉遺跡がある。この集落は8世紀前半から中頃にかけて営まれたものである。筑後市は葛野（葛野）駅家の比定地に挙げられているが、これに相当する遺跡は未だ見つかってはいない。が、久富斗代遺跡からは鴻臚館系の丸瓦が、羽犬塚中道遺

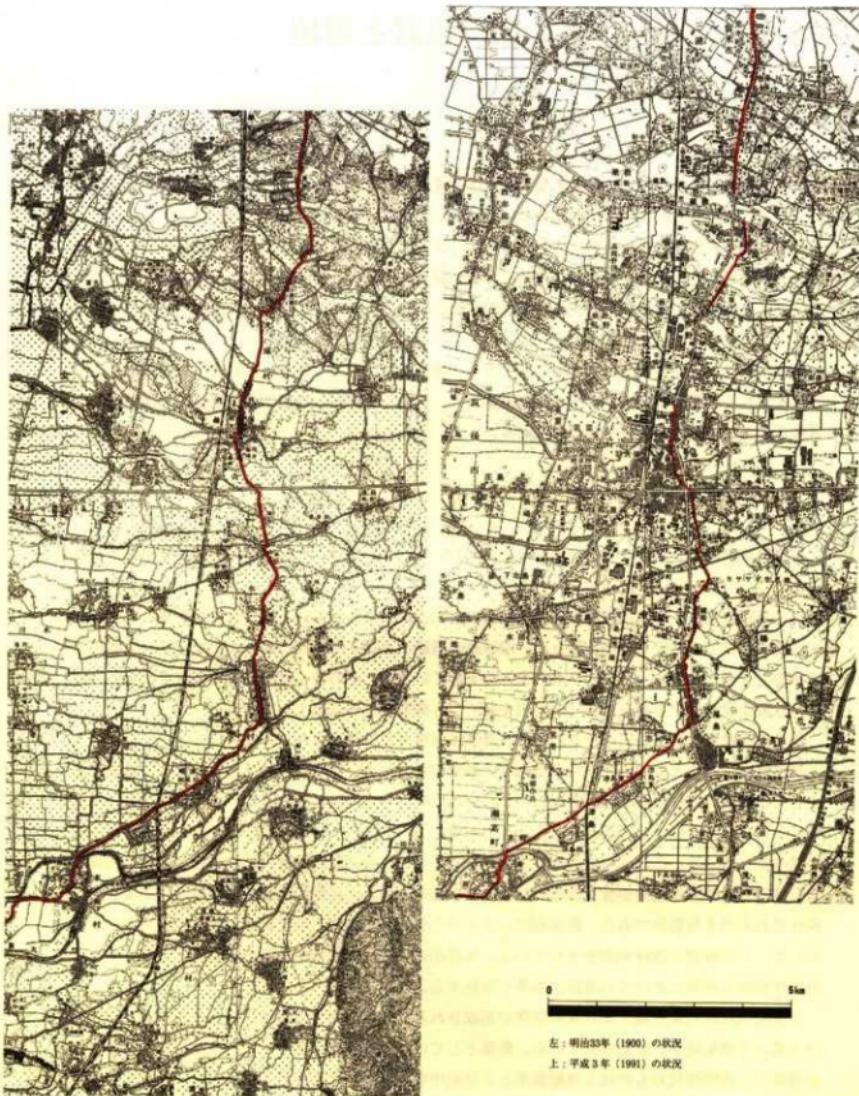
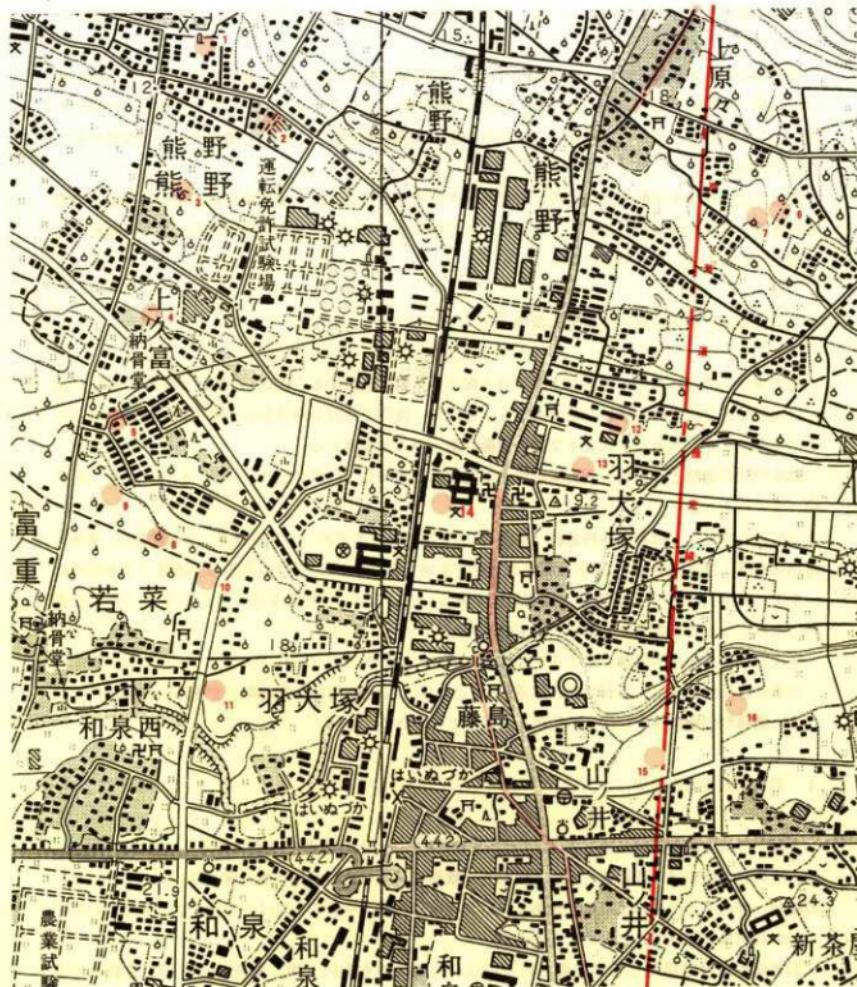


Fig. 2 旧薩摩街道路線図 (S = 1 / 25,000)



- |                  |                |                 |
|------------------|----------------|-----------------|
| 1 熊野脇敷遺跡 1次調査区   | 2 熊野脇敷遺跡 2次調査区 | 3 久富大門口遺跡       |
| 4 久富斗代遺跡         | 5 久富市ノ玉遺跡      | 6 前津中ノ玉遺跡 1次調査区 |
| 7 前津中ノ玉遺跡 2次調査区  | 8 若菜大堀遺跡 1次調査区 | 9 若菜大堀遺跡 2次調査区  |
| 10 若菜鞍ノ本遺跡 1次調査区 | 11 若菜森坊遺跡      | 12 羽犬塚中道遺跡      |
| 13 羽犬塚射場ノ本遺跡     | 14 羽犬塚寺ノ脇遺跡    | 15 山ノ井川口遺跡      |
| 16 徳久中牟田遺跡       | 奈 アミ線は旧薩摩街道    |                 |

Fig. 3 羽犬塚寺ノ脇遺跡の周辺遺跡分布図 (S = 1 / 12,500)

跡からは墨書き土器が多く出土している。現在整理作業中であるが、大半のものに「東」の字が書かれている。

平安時代から中世にかけて、筑後国内では多くの荘園が開かれていく。鎌倉時代までには市の北部に広川荘（熊野神社領）、南部に水田荘（水田天満宮領）、下妻荘（太宰府天満宮安樂寺領）が開かれていたことが知られている。現在、これらの荘園の地頭の屋形跡と思われる遺跡が、市の西部で見つかっている。

近世には、筑後を支配した田中氏、有馬氏（久留米藩）により、大規模な河川改修や街道沿いの宿場の整備、産業の育成が行われた。久留米から肥後熊本へ通じる薩摩街道沿いの羽犬塚が宿場町として整備されたのも、この時期である。

### 3 羽犬塚寺ノ脇遺跡周辺の歴史的環境

羽犬塚寺ノ脇遺跡は市の中央部、大字羽犬塚字寺ノ脇に位置する。国道209号線（薩摩街道）に面し、現在は市立羽犬塚小学校の敷地内となっている。周辺では古い時代から人の生活の痕跡を見ることができ、また、当地が古代より交通の要衝であったことも窺える。

弥生時代の遺跡としては、羽犬塚射場ノ本遺跡第1次調査（周溝状遺構）、山ノ井川口遺跡（終末期、溝）がある。

古代のものとしては若菜森坊遺跡（集落）、羽犬塚射場ノ本遺跡（7世紀後半～8世紀初め、集落・道路状遺構・墨書き土器出土）、羽犬塚中道遺跡（集落、墨書き土器出土）、前津中ノ玉遺跡（8世紀初め～中頃、集落）、山ノ井川口遺跡（西海道）がある。これらには古代律令制を考える上で、重要な資料となりうるもののが含まれており、大変興味深い。

中世には徳久中牟田遺跡、山ノ井川口遺跡（共に一連の溝）が見られる。

近世には薩摩街道（大半が現在の国道209号と重複）、羽犬塚町囲（宿場町）がある。当遺跡の周辺には、宿場町の情景を今に伝える箇所も見ることができる。

### 4 羽犬塚御茶屋の歴史

文献上で羽犬塚が確認できるのは、『上井覺兼日記』天正14年8月1日条に見える「灰塚」とされる。その名の由来は「駅馬塚（はゆまつか）」「駿馬塚（はやまつか）」「端犬塚（はいぬつか）」などの訛り化、羽の生えた犬の伝説などがある。羽犬塚に限らず、中世ごろには小地頭により街道沿いにいくつかの宿場が形成されていたようである。

羽犬塚が近世宿場町として整備されるのは江戸時代の有馬氏入国、幕府による御定貢銭の決定（1711）後で、春の馬市開催の許可（1722）、宿駕籠の制定（1741）、御茶屋の設置（1749）などがたて続けに行われている。御茶屋は平井鑄物師平井宇太の屋敷地に建設されている。

明治以降、宿場町制度の廃止と教育勅書の発布に伴い、当地は明治6年（1873）に康斎小学校の敷地となった。以後羽犬塚小学校（1878）、羽犬塚尋常小学校（1888）、羽犬塚国民学校（1941）と改称し、昭和22年（1947）現在の羽犬塚小学校となった。主な建物である旧管理棟は昭和38年～41年（1963～66）、体育館が昭和57年（1982）、各教室棟が昭和62～63年（1987～88）に建設されている。

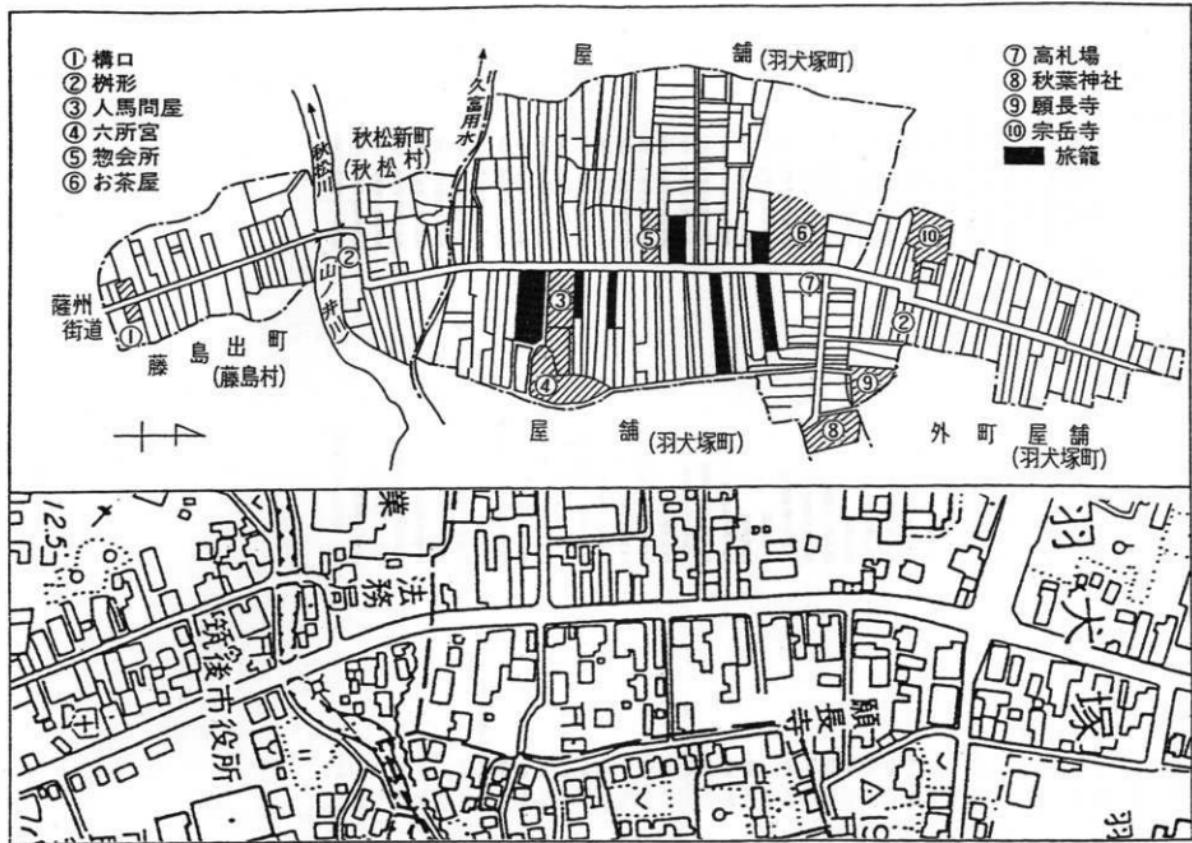


FIG. 4 羽犬塚宿町略図（『筑後市史』より転載）

## 注

今回文章中に挙がっている遺跡の大半は、整理作業中のものである。これらは近々中に報告書を刊行する予定である。

## 参考文献

小田 富士夫	『島ノ平遺跡』	八女市教育委員会 1964
岩崎 光	『武山遺跡』	筑後市教育委員会 1966
小田 富士夫	『祇園遺跡』	筑後市教育委員会 1970
酒井 仁夫・武木 篤一	『福岡県八女市吉間所在遺跡群調査報告』	福岡県教育委員会 1972
川添 昭人	『城王寺古墳』	筑後市教育委員会 1984
川添 昭人・惣	『椎原塚古墳』	福岡市教育委員会 1985
右田 乙次郎	『筑後羽太塚郷土史』	筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会 1987
川添 昭人	『南津中の玉遺跡』	筑後市教育委員会 1987
川添 昭人	『田佛遺跡』	筑後市教育委員会 1988
佐々木 隆彦	『祇敷遺跡群』	筑後市教育委員会 1990
田中 康信	『山門遺跡群』	福岡市教育委員会 1991
永見 秀徳	『高江遺跡』	筑後市教育委員会 1991
永見 秀徳	『海島遺跡』	筑後市教育委員会 1992
赤司 善彦	『久富市ノ玉遺跡』	福岡県教育委員会 1993
赤司 善彦	『高江原ノ玉遺跡』	福岡県教育委員会 1993
伊崎 俊秋	『北山今小路遺跡』	立花町教育委員会 1993
佐田 茂	『久原古墳』	筑後市教育委員会 1993
小林 勇作	『権助遺跡』	筑後市教育委員会 1993
田中 康信	『藤ノ尾大塚遺跡』	福岡市教育委員会 1994
小林 勇作	『四ヶ所古四ヶ所遺跡』	筑後市教育委員会 1994
筑後市教育委員会 編	『筑後東部地区遺跡群』	筑後市教育委員会 1994
小林 勇作	『久富鳥坂遺跡』	筑後市教育委員会 1994
筑後市教育委員会 編	『筑後東部地区遺跡群Ⅱ』	筑後市教育委員会 1995
小林 勇作	『蹴赤坂遺跡』	筑後市教育委員会 1995
小林 勇作	『筑後西部地区遺跡群』	筑後市教育委員会 1995
小林 勇作	『筑後北部第2地区遺跡群』	筑後市教育委員会 1995
筑後市教育委員会 編	『計大塚遺跡／本』	筑後市教育委員会 1995
吉田 東明	『久富大門口遺跡』	福岡県教育委員会 1996
田中 康信	『藤ノ尾大塚遺跡』	福岡市教育委員会 1996
近木 審穂	『坊の津街道をゆく』（筑後市編）	筑後市中央公民館 1997
筑後市史編さん委員会	『筑後市史』	筑後市史編さん委員会 1998
小林 勇作	『久富大門口遺跡』	筑後市教育委員会 1998
柴田 幹	『櫛中牛田遺跡』	筑後市教育委員会 1999
小林 勇作	『筑崎前田遺跡』	筑後市教育委員会 1999
立石 真二	『筑後西部第2地区遺跡群』	筑後市教育委員会 1999
上村 美士	『南津中の玉遺跡』	筑後市教育委員会 1999
永見 秀徳	『筑後市内遺跡群』	筑後市教育委員会 1999
小林 勇作	『ちくご遺跡だより』 第10号	筑後市教育委員会 1999

## 第3章 遺構と遺物

### 1 基本層序 (Fig. 5)

羽犬塚寺ノ脇遺跡は、筑後市大字羽犬塚寺ノ脇に位置する。調査区の南約450mを西流する山ノ井川（秋松川）により形成された川岸段丘上に位置する。

調査は始め、重機による表土の除去から行われた。表土を約10cmほど掘り下げるとき、遺構面に達する。遺構は橙褐色粘質土に掘り込まれている。橙褐色粘質土は約40cmほど堆積しており、その下は山ノ井川（秋松川）により形成された、黄色の砂層と砂礫層（1cmほどの礫が多く見られる）が交互に堆積する。砂礫層内でも砂層と礫層に細分が可能である。砂は約100cmほどで青白色に変化する。

### 2 遺構 (Fig. 6)

調査区の東半分は、旧校舎の基礎抜き取りの際の搅乱により、遺構は確認されなかった。西側は、町囲いに伴うと思われる溝状遺構が一条確認されたが、その上部には飼育小屋や排水溝、簡易倉庫の基礎などがあり、遺跡の保存状況としてはあまり良好な状態とは言えなかった。他に北西側に円形の土壙1基と、井戸が1基確認できた。井戸に関しては、コンクリート枠、塩素ビニール製の水道管が確認できたため、現代のものと判断し、掘り下げは行わなかった。

### 溝状遺構 (Fig. 6, 7)

調査区を南北に走る遺構で、長さ約18.5mを確認した。断面形は台形状をしており、検出面での幅約1.2m、底部幅約0.6m、深さ約1.0mを測る。埋土は最下層（5層群）でシルト質が確認できるが、それより上は埋め戻し時の埋土（1～4層群）、覆土（0層群）となる。水流の痕跡などは確認できなかった。

遺物は陶磁器片や土師器片、木製品、鉄器などがある。その多くが2層土からの出土であり、溝の埋め戻しの際の混入品と考えられる。また、0層からも若干の遺物を採集した。

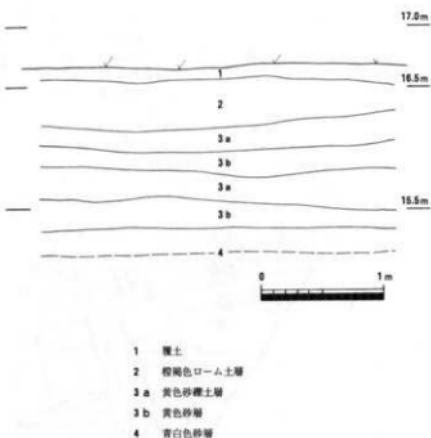


Fig. 5 基本層序 ( $S = 1/40$ )

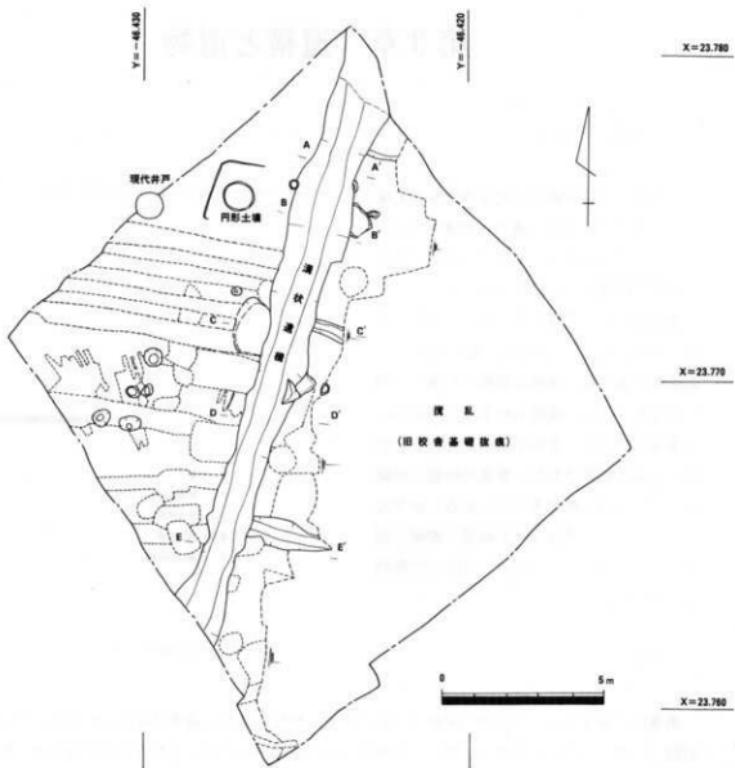


Fig. 6 羽犬塚寺ノ脇遺跡全体図 ( $S = 1/150$ )

#### 円形土壙 (Fig. 6)

調査区の北西で検出された直径約0.95mの土壙である。周囲にはこれを取り囲んでいた一辺約2mほどの方形と思われる掘り方の残存が見られた。当初は井戸として調査を行ったが、20cmほどで現代の瓦を多量に出土し、その直下で地山土となつた。これにより、この土壙は現代の廃棄土壙であると判断した。



- |     |               |     |                          |     |           |
|-----|---------------|-----|--------------------------|-----|-----------|
| 0 a | 暗灰色土層（粘土）     | 1   | 棕褐色土層（地山土の流れ込み）          | 5   | 黄色シルト質層   |
| 0 b | 暗灰褐色土層（+）     | 2 a | 暗褐色土層                    | 5 b | 黄色砂質土層    |
| 0 c | 暗灰褐色砂質土層（+）   | 2 b | 暗褐色土層（2cm大の小石を含む）        | 5 c | 暗灰褐色砂質土層  |
| 0 d | 黒色土・黃色土混合層（+） | 3 a | 褐色土・暗灰褐色土混合層（1cm大の小石を含む） | 5 d | 暗灰褐色シルト質層 |
| 0 e | 複灰褐色土層（+）     | 3 b | 暗灰色土層（1cm以下の小石を含む）       |     |           |
| 0 f | 黑灰褐色土層（+）     | 3 c | 暗黄灰色シルト質層                |     |           |
| 0 g | 灰褐色土層（+）      | 4   | 黒灰色土層                    |     |           |
| 0 h | 灰褐色砂質土層（+）    | 4 b | 暗灰褐色砂質土層                 |     |           |

Fig. 7 溝状遺構土層断面図 (S = 1/40)

### 3 遺物

#### 溝状遺構出土遺物 (Fig. 8)

溝状遺構からの出土品には、前述のように陶磁器片や土師器片、木製品、鉄器などがあり、その大半が2層からの出土品である。

##### 土師器

土師器には豆皿（1）小皿（6）、皿（5）、壺（2～4）、置台（7）、大型鉢（8）、土鍋（9・10）がある。この他にも多くの小破片を出土したが、図化しうるものではなかった。これらの大半は2層からの出土である。5は0層、8は4層からの出土である。

##### 磁器

磁器には碗類（11～14）、湯呑（15）、蓋（16）、壺（17・18）がある。これらはトレンチ掘り下げの際の出土品が多く、17は2層、15・16は4層からの出土品である。18は日本陸軍のものである。この他にも青磁片などの小破片が出土した。

##### 陶器

陶器には湯呑（19）、擂鉢（20）がある。いずれも2層からの出土である。ほかにもこね鉢の破片などがある。陶器の出土量は遺物の出土量に対して少ない。

##### 瓦質・瓦器・瓦

瓦質土器には鉢（21）があるが、小破片であり、全体像は不明である。2層出土。瓦器には鉢（22）がある。下方に向かって黒色味を増している。2層出土。瓦（23・24）はいずれも軒丸瓦の瓦当部分である。23は黒灰色で4層出土、24は暗茶褐色で3層の出土である。ほかに平瓦の破片も出土している。

##### 木製品

小皿（25）である。塗などは見られないが、口縁端部に黒色の付着物が見られる。また、内面には形成時につけたと思われる2～3条の刃物の痕跡が見られる。4層出土。

##### 鉄器

楔状製品（26）がある。ほぼ完形品であるが、遺存状態は悪い。2層出土。

#### 攪乱内出土遺物

調査区の東側は基礎抜き取りの際に遺構の破壊を受け、様々な遺物が混入している。出土品は陶磁器、土師器、瓦などがあり、これらの中には筑後市の水田焼、赤坂焼と思われるものを見ることがある。

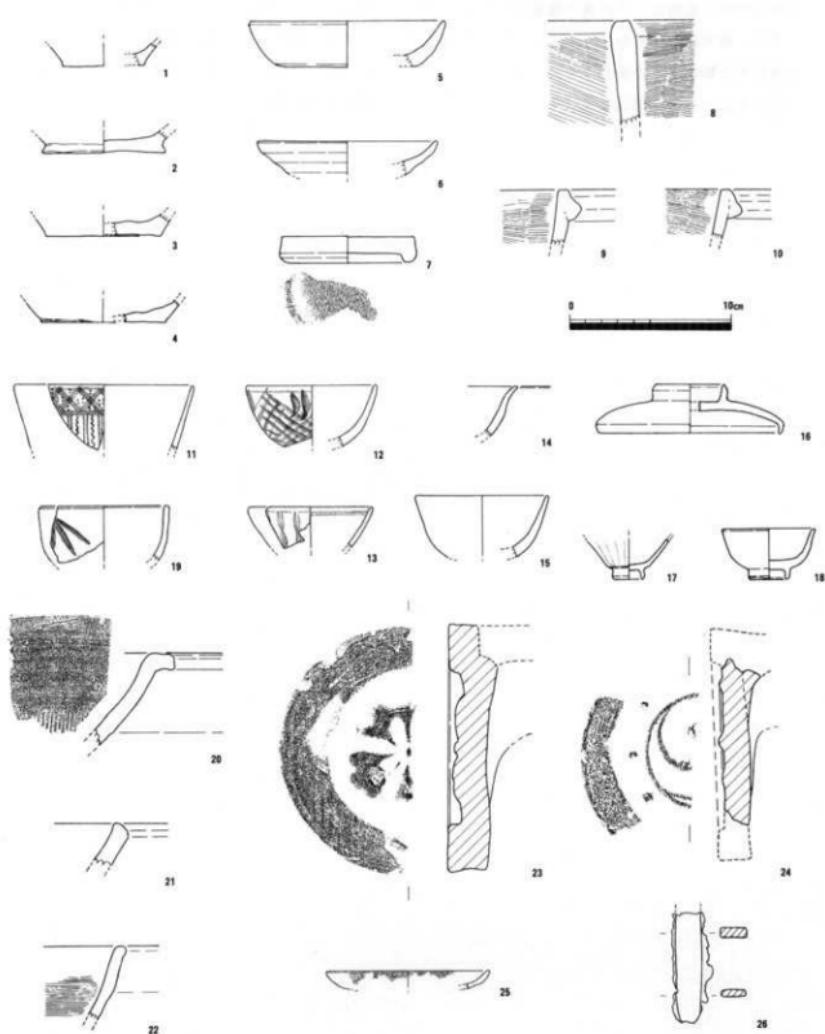


Fig. 8 溝状遺構出土遺物 (S = 1 / 3)

#### 4 小結

今回の調査で確認された溝は、断面が逆台形で、人為的に埋め戻された事が分かった。しかし、こ

からの出土遺物は、この溝の構築年代および廃棄年代を確定させるものではなかった。

また、御茶屋本体部分については、今回の調査部分より東側にあたり、当初は御茶屋の建物の配置状況などを解明する手掛かりを得られるのではと期待されたが、基礎抜きに伴う攪乱が激しく、調査には至らなかった。攪乱を受けてない部分での遺構の確認を今後に期待したい。

## 第4章 考察

### 1 筑後市内の近世窯業

豊臣秀吉による朝鮮半島出兵に伴い多くの陶工が日本へ渡来し、各地に窯業を浸透させていった。北部九州でも肥前有田、同伊万里唐津、豊前上野、筑前高取などに陶磁器の窯が開窯し、さらに各地へと分散していった。

この動きは筑後国内でも見られ、筑後市内にも多くの窯が開かれている。これらは戦後の産業構造の変化に伴い、あるものは閉窯し、あるものは規模を縮小しながらも現在に伝えられている。今回報告された羽犬塚寺ノ脇遺跡では、筑後市内の焼き物と思われるものが、擾乱内からではあるが出土している。ここではこれらの窯とその出品について、大まかな概要を述べてゆく。

#### 水田焼

筑後市内の近世窯の中で、最も古い歴史を持つものが水田焼である。これは、その始祖本田能登の祖先が菅原道真の大宰府配流に従い九州に移り住んだという伝承にも現れているように、太宰府天満宮との強いつながりを持っている。開窯時期は天正年間（1573～1592）で、神具用の素焼きをその紀元としている。この時期の窯跡は、現在の大字水田字裏町にあったというが、現在のところ正確な場所は確認されていない。この付近では、多くの焼き物の破片が出土するということである。水田焼は農作業の合間に産業として広まり、3代左兵衛、4代庄左衛門の時にそれぞれが土鍋を献上、5代新

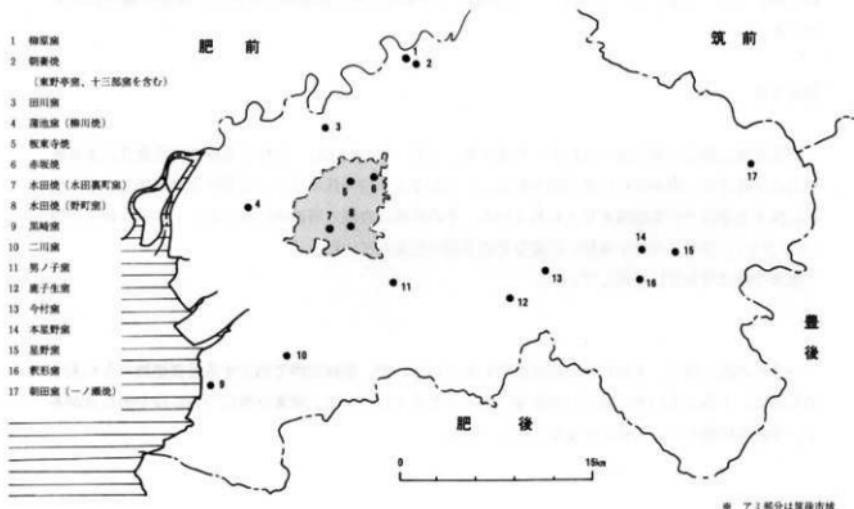


Fig. 9 筑後国近世窯位置図 ( $S = 1/379,000$ )

左衛門の時に御用窯に下命された。その後、近藤家が分家し、現代に至るまで水田焼の中心を担っている。

水田焼の献上品は「半田土鍋」と呼ばれる素焼の泡烙で、茶の湯に用いられる灰器である。「半田泡烙」は水田焼の他に柳川の蒲池焼のものも指している。水田焼が得意としているものは民具用の素焼きの製品で、大甕、火鉢、瓦（赤目・青目）の2種あり）、井戸側などがある。また、民芸品として素焼きの人形がある。これは「水田人形」と呼ばれ、各種の節句や正月の際に、贈答品として親しまれてきたものである。この中には着色されたものも見受けられる。これは山城の伏見人形を参考に作られたものである。また明治に入ると土管、鉢、火消し壺、七輪、植木鉢などが盛んに作られるようになり、釉薬を用いることも見られるようになった。

現在、水田焼は産業構造の変化に伴い、その規模を縮小してきている。現在では素焼き、陶器とともに製作しており、焼締めによる渋い色合いを特徴としている。

#### 赤坂焼

赤坂焼は、水田の次郎吉が良質な陶土を求め、文化13年（1816）に赤坂の地に窯を開いたのが始まりと伝えられる。その後、窯は三原富次、緒方次助と受け継がれ、以後緒方家の系統によって経営された。藩政時代には御用窯として御用品の製作を行い、天保年間（1832～1836）には柳原焼（9代藩主頼徳創始の御庭焼）の焼成にも従事した。また、肥後正代焼は赤坂焼の工人井上利左衛門等によって開窯されたものである。

赤坂焼は当初、主に食器、茶器などの陶器を生産し、後には日用品、食器、植木鉢、土管などの生産を行っている。作風は筑前高取焼や肥後小代焼に似通っており、釉薬は蕎麦釉、藁釉、緑青釉などシソ釉の地に、他の釉薬のかけ流しを行う。「赤岡」「赤坂」の銘がある。赤坂焼の民芸品に、赤坂人形（別名「ててっぽっぽ」）がある。これは型により形成された素焼きの人形で、彩色が施されたものである。

#### 坂東寺焼

坂東寺焼は柳川の蒲池焼の流れをくむ焼き物である。その由来は、田中平兵衛が有馬豊氏により焼物司に任命され、坂東寺村に窯が開かれたことに始まる。田中氏は代々、分領内土物屋師として、焼物に関する藩内での支配権を与えられている。その作風は自然と蒲池焼に似ており、半田土鍋、土器（カワラケ）、手焙り火鉢や風炉、灰器などの茶器を生産していた。

坂東寺焼は現在では閉窯している。

いずれの焼き物も、窯跡自体の調査が行われていないが、筑後市内で出土する近世焼物のうち大半のものは、土器は水田焼、陶器は赤坂焼であると考えられている。坂東寺焼については不明な点が多く、今後水田焼との比較検討が重要となってくる。

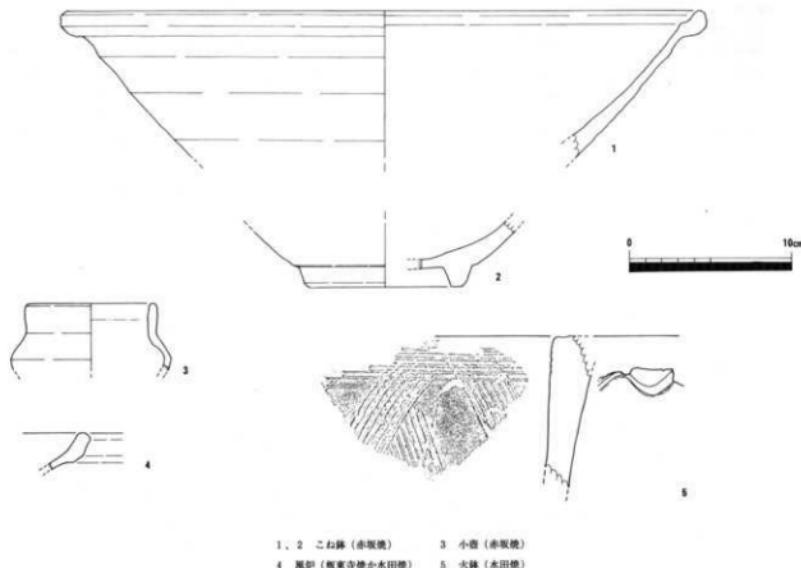


Fig.10 水田焼、赤坂焼、板東寺焼と思われる土器（羽犬塚寺ノ脇遺跡出土、S = 1／3）



Fig.11 水田人形（市内採集品・S = 1／2）

（参考文献）

右田 乙次郎	『木田の平田土崩地』	筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会 1973
筑後郷土史研究会・編	『筑後赤坂地』	筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会 1977
筑後郷土史研究会・編	『三原家と赤坂娘』（筑後市むらの生いたちの記 第四集）	筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会 1977
右田 乙次郎	『赤坂・鹿敷むらの生いたちの記』	筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会 1978
右田 乙次郎・編	『木田校区郷土史』	筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会 1981
筑後市史編さん委員会・編	『筑後市史』	筑後市史編さん委員会 1998

Tab. 1 溝状遺構出土遺物一覧表（土器・陶器）

Fig.No	器種	法量 （口径×底径×高さ） ＊単位：cm	遺存部位 （遺存量）	焼成	胎 土	色 調	備 考
7-1	土器器・小皿	-- × 5.0 × --	底部（1／5）	良	精	良	明赤褐色 ナゲ整形、回転糸切り。
2	土器器・环	-- × 7.4 × --	底部（1／3）	やや良	微細砂粒を少量含む	茶褐色 ナゲ整形、回転糸切り。形成は粗雑。	
3	土器器・环	-- × 7.0 × --	底部（1／4）	やや良	精	良	茶褐色 ナゲ整形、回転糸切り。
4	土器器・环	-- × 7.6 × --	底部（1／4）	良	精	良	黄茶褐色 ナゲ整形、回転糸切り。形成は粗雑。
5	土器器・皿	12.0 × 6.2 × 2.8	口縁部（1／8）	やや良	微細砂粒を少量含む	淡茶褐色 ナゲ整形。	
6	土器器・小皿	11.0 × -- × --	口縁部（1／8）	やや良	微細砂粒を少量含む	黄茶褐色 ナゲ整形。	
7	土器器・蓋台？	8.0 × 8.2 × 1.6	(1／3)	良	精	良	明茶褐色 ナゲ整形。底部内面には布目模様。
8	土器器・大型鉢	-- × -- × --	口縁部（縦片）	良	精	良	明茶褐色 内外ナゲ整形。内面はハケ目。
9	土鍋	-- × -- × --	口縁部（縦片）	やや良	2mm大の砂粒を微量含む	淡茶褐色 外側ナゲ整形。	
10	土鍋	-- × -- × --	口縁部（縦片）	良	精	良	茶褐色 内面ナゲ整形。内面はハケ目。
11	磁器・碗	11.0 × -- × --	口縁部（縦片）	良		乳白色 象付、明青色（コバルト）にて文様。	
12	磁器・小皿	8.0 × -- × --	口縁部（1／5）	良		乳白色 象付、明青色（コバルト）にて文様。	
13	磁器・小皿	7.6 × -- × --	口縁部（縦片）	良		乳白色 象付、暗青色の背景。	
14	磁器・口先鏡	-- × -- × --	口縁部（縦片）	良		乳白色 淡青緑色の透明釉。	
15	磁器・薄唇	8.2 × -- × --	口縁部（縦片）	良		乳白色 印判樂行（明青色）。	
16	磁器・蓋	4.1 × 11.2 × 3.0	(1／4)	良		乳白色 栗褐色。蓋の部分に裏灰釉。つまみの上端は無釉。	
17	磁器・环	-- × 1.8 × --	下半部（縦片）	良		乳白色 象付、明青色にて文様。	
18	磁器・环	5.7 × 2.3 × 3.1	(1／2)	良		乳白色 白色盤、口縁端部は淡茶色。内面に幾重革、「多」「田中」字。	
19	陶器・薄唇	8.0 × -- × --	口縁部（縦片）	やや良	精	良	淡乳灰色 象付、褐緑青色にて文様。表面に滑輪軌。全体に貴人あり。
20	陶器・環耳	-- × -- × --	口縁部（縦片）	良	精	良	赤褐色 焼跡、表面は明茶褐色。ナゲ整形だが粗雑。
21	瓦質・鉢	-- × -- × --	口縁部（縦片）	やや良	精	良	淡乳灰色 ナゲ整形。
22	瓦質・鉢	-- × -- × --	口縁部（縦片）	不良	1~2mm大の砂粒を含む	淡灰灰色 全体に磨痕が見られる。外側はナゲ整形。内面はハケ目。	

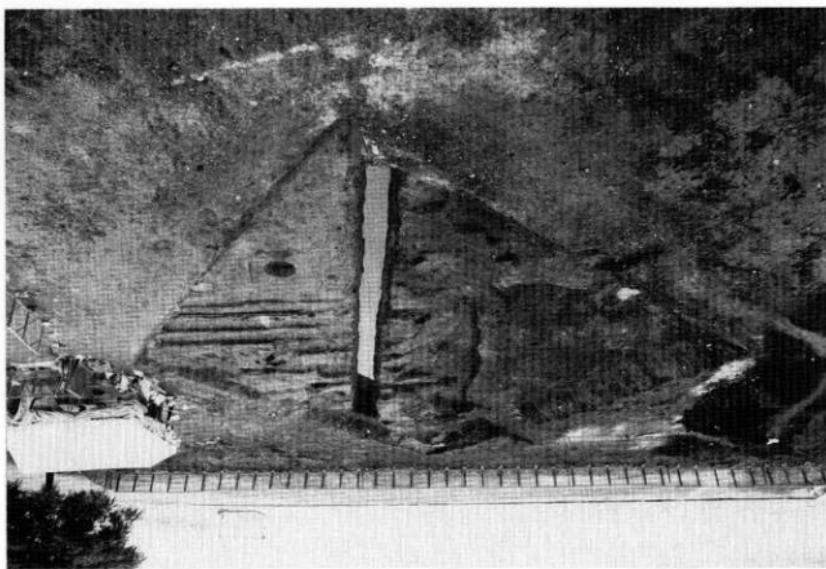
Tab. 2 溝状遺構出土遺物一覧表（木器）

Fig.No	器種	法量 （口径×底径×高さ） ＊単位：cm	遺存部位（遺存量）	備 考
7-25	小 皿	10.0 × -- × --	口縁部（1／4）	内面に工具痕。

Tab. 3 溝状遺構出土遺物一覧表（鉄器）

Fig.No	器種	遺 存 量	備 考
7-26	楔状製品	完形	遺存状態は悪い（劣化が進む）。

日本大震帶 / 震源地圖 全景 (北九島)



版圖



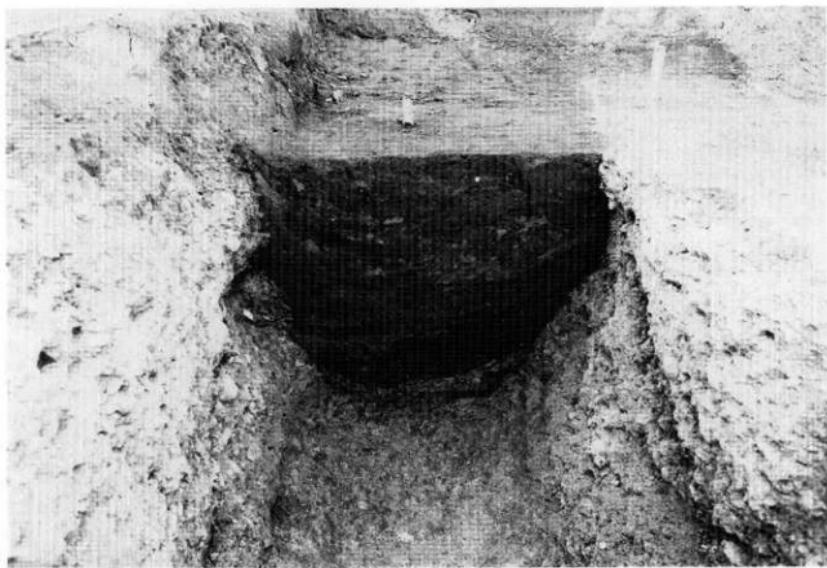
1. 羽大塚寺ノ脇遺跡 試掘調査 第1トレンチ（西から）



2. 羽大塚寺ノ脇遺跡 試掘調査 第3トレンチ（南から）



1. 羽犬塚寺ノ脇遺跡 溝状遺構 完掘状況（北から）



2. 羽犬塚寺ノ脇遺跡 溝状遺構 A軸土層断面（南から）



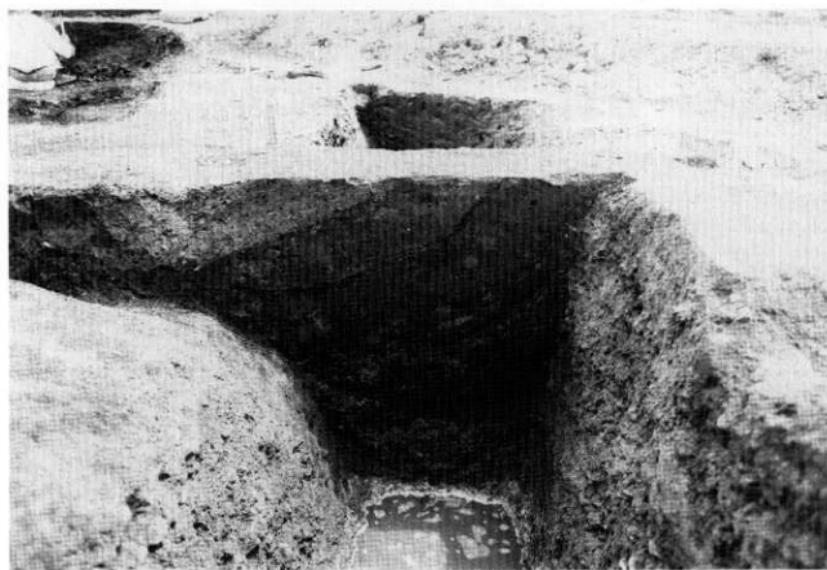
1. 羽犬塚寺ノ脇遺跡 溝状造構 B軸土層断面（北から）



2. 羽犬塚寺ノ脇遺跡 溝状造構 C軸土層断面（北から）



羽大塚寺ノ脇遺跡 溝状遺構 D軸土層断面（北から）



羽大塚寺ノ脇遺跡 溝状遺構 E軸土層断面（北から）



Fig. 8-9



Fig. 8-10

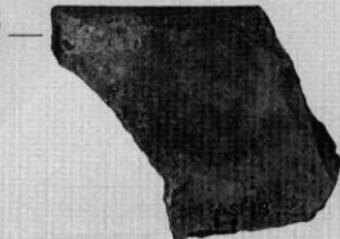


Fig. 8-8



Fig. 8-7



Fig. 8-11



Fig. 8-12



Fig. 8-14



Fig. 8-15



Fig. 8-16

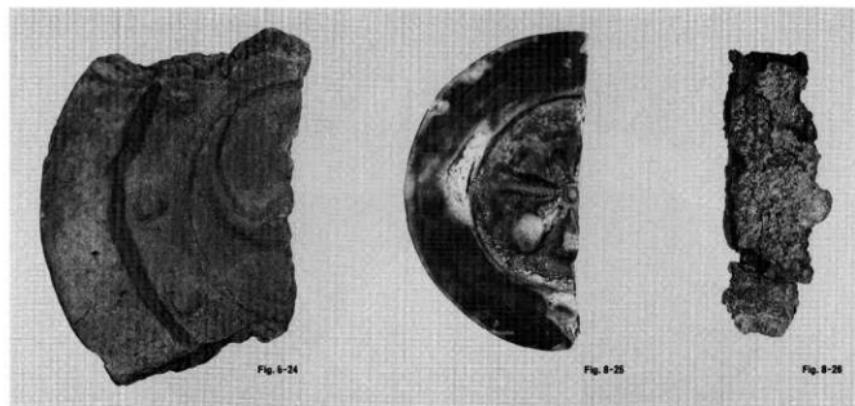


Fig. 8-18

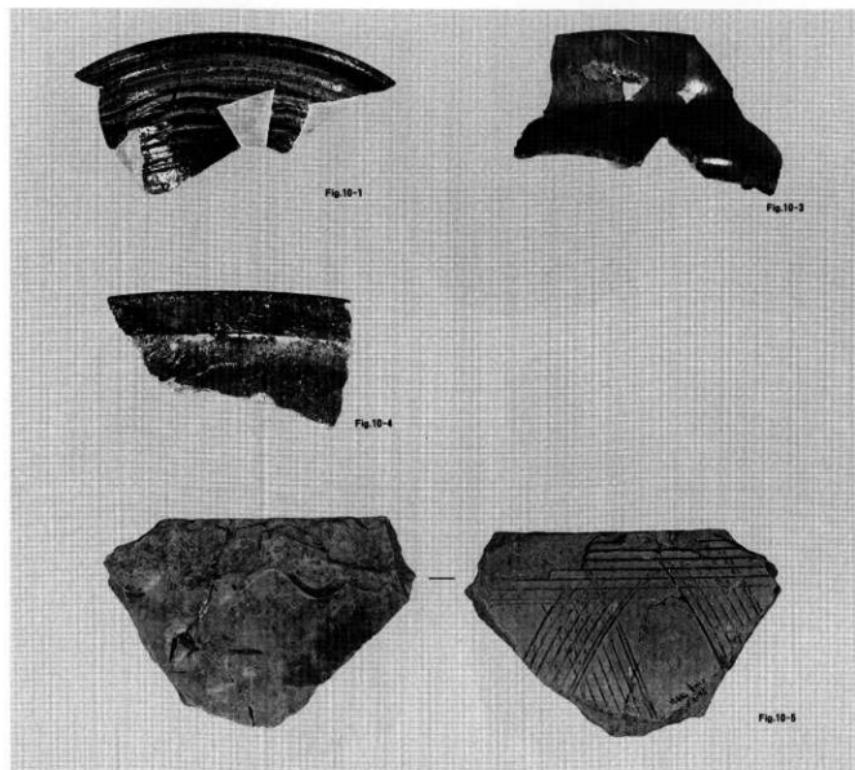


Fig. 8-20

清状造模出土遗物（1）（土师器·陶磁器）



溝状遺構出土遺物（2）（瓦・鉄器）



水田焼・赤板焼・板東寺焼と思われる土器（羽犬塚寺ノ脇遺跡出土）



Fig.11-1

Fig.11-2

水田人形（市内採集品）

## 羽犬塚寺ノ脇遺跡

筑後市文化財調査報告書

第24集

平成12年3月31日

発行 筑後市教育委員会

〒833-8601 福岡県筑後市大字山ノ井898

印刷 有限会社新幸印刷

〒830-1117 福岡県三井郡北野町上弓削696-6

本書に掲載した地図は建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分の1地形図を複製したものである。

Fig.2 承認番号 平12九権、第65号; Fig.3 承認番号 平12九権、第67号

本書に掲載した地図は建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。

Fig.2 承認番号 平12九権、第66号